

『緋文字』の一考察

Chillingworth と錬金術的変容

高場 純子

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of *The Scarlet Letter*

—Chillingworth and His Alchemistic Transfigurations—

TAKABA Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper focuses on Chillingworth, one of the main characters in *The Scarlet Letter*. He is an alchemist who has a diabolic image. But interestingly, his alchemy which is called “black art” performs “miraculous cures.” He transforms the others into something noble, just like ugly weeds “converted into drugs of potency.” The narrator’s comment in “Conclusion” shows Chillingworth’s role: “their earthly stock of hatred and antipathy transmuted into golden love.” In other words, his alchemy consequently redeems not only other character’s soul but also his own in this “tale of human frailty and sorrow.”

序論

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の長編『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) ¹の中心人物は、姦通の罪を犯した罰として胸に赤いAの文字をつけて生きるヘスター・プリン (Hester Prynne) とその娘パール (Pearl)、ヘスターの姦通相手でそれを隠し続ける青年牧師アーサー・ディムズデル (Arthur Dimmesdale)、ヘスターの夫でありながら偽名で素性を隠し、妻の姦通相手を探し出して復讐を遂げることに情熱を傾けるロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth) の4人である。多様な解釈の成り立つこの作品においては、どの人物に焦点を当てるかによっても解釈は大きく異なってくるが、本稿では、チリングワースに焦点を当てて考察する。

チリングワースは、ヘスターやディムズデルを苦しめる邪悪な復讐者、悪魔的な科学者というイメージがあまりに強烈であるために、「悪」の側面ばかりが注目されがちな人物である。しかし、多くの人が指摘するように、ホーソーンが彼をマイナスの要

素とプラスの要素を併せ持つ両義的、多義的人物として描いていることを見落としてはならない。とりわけ、これまであまり注目されてこなかった彼の「善」の側面に焦点を当てることは、作品の解釈を大きく変えると思われる。例えば、彼の復讐の行為が、結果的に罪を隠し続ける偽善者ディムズデルの内面を変化させ、最期の「罪の告白」へと導いたという解釈も可能になる。

このような視点から作品を読み解くとき鍵となるのがチリングワースの「錬金術(alchemy)」である。いくつかの文脈から、彼本来の姿は一般的に認知されている「医者」や「科学者」ではなく、「錬金術師」であると読み取ることができる。そして、錬金術師としてのチリングワースが、『緋文字』という物語世界において、登場人物たちの精神的変容に大きな影響を与えていると考えられるのである。

以下の章では、チリングワースと「錬金術」との関係性を明らかにし、彼と登場人物の「変容」との関係、彼の存在意義、さらにはホーソーンがチリングワースという人物を通して何を描こうとしていたの

かについて考察してゆくことにしたい。

第1章 チリングワースの両義性と「許されざる罪」

1. チリングワースの両義性

従来、チリングワースという人物は、ヘスターやディムズデルを苦しめる悪役というイメージが強く、ホーソーンの作品中で最も罪深い人物のひとりと考えられてきた。

その理由のひとつは、共同体の人々や語り手が、彼を「悪魔それ自身あるいは悪魔の配下 (Satan himself, or Satan's emissary)」、¹「悪魔の手先(diabolical agent)」(128)などと呼んでいること、さらし台に立つヘスターの姿を目撃したときの表情にみられる「蛇 (snake)」のイメージ(61)、牧師と共同生活を始めて顕著になってゆく容貌の「黒い変化」や「地獄の火」を思わせる実験室の火(127)など、悪魔を連想させる描写が多用されていることにある。

しかし一方で、悪魔のような彼がディムズデルに与える試練が、「神の許可 (the Divine permission)」(128)を得たものであるとも記されている。また、チリングワースの共同体における当初の評価は、「有能な医者 (a man of skill)」(121)というもので、彼の出現については、「天の神が一大奇跡をおこない、ドイツの大学から医術の大博士をからだごと空中を運び、ディムズデル牧師の書斎の前に下ろした」(121)とか、「ロジャー・チリングワースの時宜を得た到来に神の摂理を見ずにはおれないようであった」(121)という町の人々の肯定的な見方も示されている。

ホーソーンはこの正負のイメージをバランスよく配することによって、チリングワースの両義的な性質をうまく表現している。先に悪魔的イメージを喚起するとして挙げた、「蛇」、「黒」、「火」などについても、例えば、「蛇」が悪魔的イメージだけでなく、「神の使い」のイメージを持つように、いずれも正負両方のイメージを持っている。

このように、チリングワースという強烈な悪魔的イメージを持つ人物は、一方で正反対の意味を持つ人物として捉えなおすこともできるのである。

2. チリングワースと「許されざる罪」

チリングワースが罪深い人物とみなされる最大の理由は、ホーソーンの最も忌み嫌う、いわゆる「許されざる罪 (The Unpardonable Sin)」²を犯したことにある。

チリングワースは医者として、また友人として、ディムズデルに接近し、自らの正体を隠しながら、「罪のしるし」を探すために「金脈を求める鉱夫 (a miner searching for gold)」や「墓穴をあばく墓堀り人夫 (a sexton delving into a grave)」(129)のように彼の心の中を掘り返し、詮索する。しかも、罪のしるしを見つけた後もそれに飽き足らず、「牧師の内面世界の単なる観察者 (a spectator) ではなく、主人公のひとり (a chief actor) になった」(140)という。

「知 (head)」と「心 (heart)」のバランスを重視し、人間の「心」を何よりも神聖な領域と考えていたホーソーンにとって、このような「冷たい知的好奇心 (cold philosophical curiosity)」(; 251)を満たすため、他人の心を侵犯することは最悪の罪、すなわち「許されざる罪」なのである。

ホーソーンの作品中でこの罪を犯す人物は、異常に知性が発達し、人間らしい暖かい心を失った者として描かれることが多い。科学の急速な発展が「神に取って代わろうとする人間の傲慢さ」³を生みかねないことへのホーソーンの危惧を反映し、彼らの神をも恐れぬ無謀な挑戦は、自ら悲惨な結果を招く。

この点について、丹羽隆昭は、ホーソーンの「許されざる罪」と「回帰のイメージ」の関係を指摘しているが、⁴これはホーソーンの作家としてのジレンマとも関係していて興味深い。なぜなら、人間の「心」の奥底を洞察することは、作家ホーソーンの姿にほかならず、「許されざる罪」を犯す者たちを否定することは、作家としての自分を否定することにもつながるからである。

ホーソーンは生涯にわたってこのテーマを描き続けた。彼は「許されざる罪」を最悪の罪と非難する一方で、その罪を犯す者たちに対し共感に近い強い関心を抱いていたとも考えられる。よって、この罪を犯した者を非難しているからといって、一方的に「悪」と断じることもしないものである。

第2章 チリングワースと「錬金術」

1. チリングワースと「錬金術」との関係

チリングワースと錬金術との関係は、次のような文脈から類推することができる。

“My old studies in alchemy,” observed he, “and my sojourn, for above a year past, among a people well versed in the kindly properties of simples, have made a better physician of me than many that claim the medical degree. . . .” (71)

“leech” や“physician”など「医者」を意味する語の多用が示すとおり、チリングワースは共同体に「医者として登場し、医者として丁重に受け容れられた」(119)という。

しかし、チリングワースという名が偽名であるように、「医者」という姿も本来の姿を隠すための仮面である。上の文は、チリングワースが「医学の学位」を持っている正式な医者ではないこと、彼の「医術」が錬金術的知識の応用というべきものであって、彼本来の姿は「医者」ではなく「錬金術師」であることを暗示している。また、次の文で言及される実在の錬金術師パラケルスス(Paracelsus, 1493-1541)など、名高い錬金術師の多くは優秀な医者であったともいわれている。⁵

“I know not Lethe nor Nepenthe,” remarked he; “but I have learned many new secrets in the wilderness, and here is one of them,—a recipe that an Indian taught me, in requital of some lessons of my own, that were as old as Paracelsus. . . .” (72)

このように、チリングワースはインディアンに捕らわれていた間に、錬金術師パラケルスス伝来の秘法と引き換えに、森に生える「薬草や薬根(medicinal herbs and roots)」(70)についての知識を得たという。

チリングワースが「醜い雑草(ugly weeds)」(131)を集め、実験室で「効能あらたかな薬(drugs of potency)」(130)に変える作業を行う様子は、たびたび共同体の人々によって目撃されている。この作業は、「卑金属」を「金」に変容させるという錬金術的作業と全く同質のものといえ、「凡人の目には無価値

としか見えないものに秘められた効能があることを熟知している者」(121)という記述とともに、彼が「錬金術師」であることを暗示している。

チリングワースは従来、「許されざる罪」を犯す典型的な人物として、異常に知性の発達した「科学者」と考えられてきた。そのため、急激に発達を遂げ神の領域にまで手を伸ばそうとする「近代科学」の否定的側面の象徴と解釈されることも多い。だが、それと矛盾するかのよう、彼の「書斎兼実験室(study and laboratory)」の様子は次のように描かれている。

On the other side of the house, old Roger Chillingworth arranged his study and laboratory; not such as a modern man of science would reckon even tolerably complete, but provided with a distilling apparatus, and the means of compounding drugs and chemicals, which the practised alchemist knew well how to turn to purpose.(126)

ここでは「近代的な科学者(a modern man of science)」というよりもむしろ、彼が古めかしい前近代的な「錬金術師(alchemist)」である点が強調されている。このことからホーソンは、近代的な「科学者」にはない要素、例えば「胡散臭さ」や「神秘的な力」「悪魔的要素」を、あるいは、錬金術が東洋起源であることに注目すれば、次の引用が暗示するような、西洋にはない価値観の持ち主というイメージをチリングワースに与えているといえるのである。

He described him[Chillingworth] as a man of skill in all Christian modes of physical science, and likewise familiar with whatever the savage people could teach, in respect to medicinal herbs and roots that grew in the forest. (70)

このように、復讐の対象であるディムズデルも、彼との交流を通して「なみなみならぬ深さと広がりを持つ知的教養ばかりか、自分の同業衆にはとうてい求められない観念の自由闊達さ」(123)をチリングワースのなかに認め、次のような感覚を抱いている。

・・・though with a tremulous enjoyment, did he feel the occasional relief of looking at the universe through the medium of another kind of intellect than those with which he habitually held converse. It was as if a window were thrown open, admitting a freer atmosphere into the close and stifled study, where his life was wasting itself away, amid lamp-light, or obstructed day-beams, and the musty fragrance, be it sensual or moral, that exhales from books. (123)

ここには、牧師の罪を責め苛むはずのチリングワースが、ディムズデールの内面を「解放する」役割を果たしていることが示されている。

このように、錬金術師チリングワースの背景にある学問や価値観が、ディムズデールの内面を大きく揺さぶり、後の「変容」に大きな影響を与えたと考えられるのである。

2. 精神的変容と「錬金術」との関係

次の引用は、チリングワース自身の言葉である。

“・・・But, as for me, I come to the inquest with other senses than they possess. I shall seek this man, as I have sought truth in books; as I have sought gold in alchemy. There is a sympathy that will make me conscious of him. I shall see him tremble. I shall feel myself shudder, suddenly and unawares. Sooner or later, he must needs be mine!” (75)

これは彼の科学的な「冷たい」態度を示しているとして、批判的に取り上げられることが多い箇所である。

しかし一方で、「本の中に真理を求め、錬金術で金を求めたように、その男を見つけてみせる」という表現によって、「真理」や「金」が象徴する物事の「本質」を探求する錬金術師としての姿が示されてもいる。彼がディムズデールへの復讐に宿命的なものを感じ、やめることができないのは、「凡人の目には無価値としか見えないものに秘められた効能があることを熟知している者」(121)である錬金術師として、

「真実」を明らかにせずにはいられないからである。

また、「数多くの書物を読むために用いられる・・・その同じ目が人間の魂 (the human soul) を読むために用いられると、異様に鋭い洞察力を発揮する」(58)という記述も批判的に取り上げられることが多い箇所であるが、チリングワースの学問的関心が、もともと人間の「心」や「魂」にあったことを示している箇所でもある。このことは、チリングワースが錬金術師であることと深い関係がある。

一般に「錬金術」とは、「卑金属」から「金」を精製する術のことであると考えられているが、これは物質的変容という一側面を示しているに過ぎない。「卑金属」から「金」への変化というのは、人間の精神的な変容を象徴的に表現したもので、錬金術の目的は人間の精神を高めることであつたともいわれている。⁶

また次の記述からは、ホーソンが錬金術の精神的側面について十分承知していたことが推察できる。

To such a professional body Roger Chillingworth was a brilliant acquisition. He soon manifested his familiarity with the ponderous and imposing machinery of antique physic; in which every remedy contained a multitude of far-fetched and heterogeneous ingredients, as elaborately compounded as if the proposed result had been the Elixir of Life. (119)

ここに示される「不老不死の妙薬 (the Elixir of Life)」とは、あらゆる病を癒す「万能薬」であり、「賢者の石」と同様、錬金術師の求める究極のものであって、錬金術の最終段階の「完全なる人間」の姿を示したものともいわれている。⁷

これはホーソンが生涯にわたって描き続けた主題のひとつでもある。ただし、ホーソンの作品においては、人間である身が「完全性」を求めることは、超人的行為というよりも、「許されざる罪」とも深く結びついた冒瀆的な行為として描かれる。人間の欠点を完璧に治そうとし、かえって致命的な失敗をする人物が多く描かれるが、その試みが必ず失敗に終わるのも、「人間は完全にはなりえない」という

大前提がホーソンにあるからである。

しかし、この「完全なる人間」を作り上げようとして失敗する登場人物たちは、完全なる神に近づこうとする無謀な挑戦者としての魅力ももっている。それが人間の永遠の夢でありロマンであるからだろう。ホーソンも常に上昇してゆこうとする彼らの精神性を完全に否定しているわけではない。

ホーソンは人間を、「善」と「悪」の相反する性質の混合物と捉えていた。⁸錬金術においても、相反する性質を持つ物質の混合による変容の過程は「葛藤」や「試練」と呼ばれる「金」の精製に必要な不可欠のプロセスとされ、この点でホーソンの「善悪の混合」という人間観は錬金術に通じるといえる。

次の引用は、チリングワースの与える試練がディムズデルの変容に不可欠な要素であることを示している。

This diabolical agent had the Divine permission, for a season, to burrow into the clergyman's intimacy, and plot against his soul. No sensible man, it was confessed, could doubt on which side the victory would turn. The people looked, with an unshaken hope, to see the minister come forth out of the conflict, transfigured with the glory which he would unquestionably win. Meanwhile, nevertheless, it was sad to think of the perchance mortal agony through which he must struggle towards his triumph. (128)

語り手は、ディムズデルに苦しみを与える行為が「神の許し」を得たものであると示すことで、「悪」であるチリングワースが、結果的に「善」をなす可能性を暗示している。

このように、チリングワースが登場人物の内面、とりわけディムズデルの心の変容に大きな影響を与える人物であり、「錬金術」というものが人間の「心」や「魂」と関わりの深いことから、ホーソンがチリングワースを、「錬金術師」と設定したのには意味があったと考えることができるのである。

第3章 チリングワースと他の登場人物たちの変容

1. ディムズデルの変容とチリングワース

妻の姦通相手を探す、医者 of 仮面を被った錬金術師チリングワースは、罪を隠し続ける一方で聖者として人々から敬愛されるディムズデル牧師の主治医として、同じ家で二つの部屋を分け合って暮らすことになる。二人はお互いの学問領域に興味を示し、牧師が「毎日のように老医師を自分の書斎に招きいれ、また逆に実験室を訪れる」(130) こともあったという。この実験室はチリングワースが「不老不死の妙薬」を精製しているとも噂される場所であり、そこで牧師が見学したという「雑草が効能あらたかな薬になる過程 (the processes by which weeds were converted into drugs of potency)」(130) は、錬金術的変容を暗示している。

次の引用は、この実験室で行われたと思われる、「ひと束の醜い植物 (a bundle of unsightly plants)」(131) についての二人の議論である。

“Where,” asked he, with a look askance at them, for it was the clergyman's peculiarity that he seldom, now-a-days, looked straightforth at any object, whether human or inanimate, “where, my kind doctor, did you gather those herbs, with such a dark, flabby leaf?”

“Even in the grave-yard, here at hand,” answered the physician, continuing his employment. “They are new to me. I found them growing on a grave, which bore no tombstone, nor other memorial of the dead man, save these ugly weeds that have taken upon themselves to keep him in remembrance. They grew out of his heart, and typify, it may be, some hideous secret that was buried with him, and which he had done better to confess during his lifetime.”

“Perchance,” said Mr. Dimmesdale, “he earnestly desired it, but could not.”

“And wherefore?” rejoined the physician. “Wherefore not; since all the powers of nature call so earnestly for the confession of sin, that these black weeds have sprung up out of a buried heart, to make manifest an unspoken crime?” (131)

ここに描かれる、ディムズデルの物事を「横目

で見る」。「人間であろうと無生物であろうと、対象をめったに直視しない」という癖は彼の性質をよく示している。

これと対照的に、チリングワースが「罪の告白」を強く迫る態度は、「真実」の追求を本質とする錬金術師の姿であり、ここではディムズデルを「自分の精神上的の指導者として選んだ」(120)というチリングワースの側が、逆に牧師に対して「罪の告白」を迫るという「立場の逆転」が起きている。

ディムズデルは、「人間の心といっしょに埋められるような秘密を明らかにする力は、神の恩寵 (the Divine mercy) 以外にはありえません」(131)といい、そのためには「最後の審判の日」(131,132)を待たねばならず、罪の告白は「知的人間の知的好奇心を満足させる」(131)ためにすべきではないと反論する。ここで彼は、チリングワースの行為が「許されざる罪」に抵触すると暗示している。

続いてチリングワースが、罪を犯したものの多くは罪を告白することで「至上の喜び (a joy unutterable)」(132)を得るのに、それでも「心に罪の秘密を埋めている人」(132)がいるのはなぜかと尋ねる。ディムズデルは、「人間に対する情熱だとか、神に奉仕する情熱」(132)という理由をもちだし、「いったん黒くけがれた姿を世にさらしてしまうと、もはやいかなる善をおこなえず、また以前にもまして善行をつんだところで過去の罪がつぐなわれることもないから」(132)と答える。しかし、これは欺瞞に満ちた答えであって、「そういう連中はみずからを欺いているのです」(133)とチリングワースも痛烈に批判している。

そもそもディムズデルの苦悩の原因は、公の場で罪を告白することができないということであり、そしてその結果として、「真実の姿」と「偽りの姿」が逆転した状態にあるということにある。このことをチリングワースの次の言葉はよく言い当てている。

“... Wouldst thou have me to believe, O wise and pious friend, that a false show can be better—can be more for God’s glory, or man’s welfare—than God’s own truth? Trust me, such men deceive themselves!” (133)

この「神自身の真実 (God’s own truth)」と「いつわりの見せかけ (a false show)」という問題は、この作品における大きなテーマのひとつであるが、罪を犯したことを隠しながら人々から敬愛される「聖者」という「偽りの姿」を続けることがもたらす結果を、語り手は次のように表現している。

It is the unspeakable misery of a life so false as his, that it steals the pith and substance out of whatever realities there are around us, and which were meant by Heaven to be the spirit’s joy and nutriment. To the untrue man, the whole universe is false,—it is impalpable,—it shrinks to nothing within his grasp. And he himself, in so far as he shows himself in a false light, becomes a shadow, or, indeed, ceases to exist. (145-6)

このようにディムズデルが「偽りの姿」で生き続けることは、「生きながらの死」を意味する。しかも、「彼ほど真実を愛し、虚偽を憎んだ者はまたなかった」(144)がゆえに、その苦悩はいっそう悲惨なものとなったのである。

ところで、二人の議論の対象であった、「死んだ罪びとの心臓 (heart) から生え出て、いっしょに埋められた何か恐ろしい秘密を表している」(131)という「醜く黒い草」は、「隠された罪」を暴き、罪を糾弾する存在であり、チリングワースをイメージさせる。

その「醜さ」と「黒さ」は、牧師と同居してから著しく醜く黒くなってゆく、チリングワースの容貌を連想させる。また、「隠された罪」という、人の心の「最も醜い部分」をまざまざと思い出させるという点で、チリングワースの復讐の行為を連想させる。

チリングワースが「醜い草」そのものであるということは、ディムズデルの死後、復讐という情熱の対象を失った彼が、「日光にさらされてしおれていく根こそぎにされた雑草 (an uprooted weed that lies wilting in the sun)」(260)に譬えられていることから明らかである。

チリングワースの「醜い雑草」を集め「効能のある薬」に変えるという作業は、「卑金属」を「金」に

変容させる錬金術的作業と同質のものといえるが、彼自身が「醜い雑草」であるということは、彼が牧師の罪を昇華し、「救い」に導く役割を果たしていることを示しているともいえる。

罪びとの胸に寄生する「醜い雑草」のイメージは、9章のタイトルに使われている“leech”を連想させる。“leech”という語は、チリングワースが「医者」であると同時に、ディムズデールの胸に寄生する「蛭」であることをイメージさせる。「蛭」には、執拗に牧師の心を責め、牧師の生命力を奪うイメージがあるが、一方で、患部から悪い血を吸い取る医療行為使われた事実もあり、⁹「醜い雑草」が養分として「罪」を吸い取るのと同様、罪びとの「贖罪」というものをイメージさせるものである。

次の文も、チリングワースの錬金術と贖罪との関係を暗示している。

Two or three individuals hinted, that the man of skill, during his Indian captivity, had enlarged his medical attainments by joining in the incantations of the savage priests; who were universally acknowledged to be powerful enchanters, often performing seemingly miraculous cures by their skill in the black art. (127)

この「奇跡的とも見える癒し」をもたらすという“black art”は、チリングワースの錬金術を指しているが、“alchemy”の語源については、エジプト語 *khem* と、アラビア語の接頭語 *al-* が結びついた「黒い土の技術」という意味の語に由来するとの説もある。¹⁰

チリングワースの容貌の「黒い変容」は、一般に悪魔化のしるしとみなされるが、彼が「醜く黒い雑草」であるならば、その「黒」という色は、養分として吸い上げた罪びとの心の中に存在する悪魔的要素を示しているともいえる。その例が、次のディムズデールの「黒い変容」である。

The minister looked at her, for an instant, with all that violence of passion, which—intermixed, in more shapes than one, with his higher, purer, softer qualities—was, in fact, the portion of him which the Devil claimed, and through which he sought to win

the rest. Never was there a blacker or a fiercer frown, than Hester now encountered. For the brief space that it lasted, it was a dark transfiguration. (194)

この「黒い変容 (a dark transfiguration)」は、森からの帰路での冒瀆的な衝動が裏付けるように、ディムズデールの内面にも悪魔的要素が存在することを視覚的に表現しているのである。

ディムズデールに自分の内面の黒く醜い暗部の存在をはっきりと認識させることにもなる、この「黒い変容」は、最期の「罪の告白」に至るために必要なプロセスであった。その伏線には、罪の意識を燃え立たせてきたチリングワースの復讐行為がある。

このように、錬金術師チリングワースという人物は、自らの復讐行為によって結果的に復讐相手のディムズデールの魂を、無意識のうちに贖罪へと導く役割を果たしているといえる。言い換えれば、彼は罪を犯した心というマイナスの要素を、プラスの方向へと変容させる錬金術師であるともいえるのである。

2. ヘスターとパールの変容とチリングワース

チリングワースは、ヘスターやパールの変容においても重要な役割を果たしている。

例えば、第4章「対面 (Interview)」において、監獄にチリングワースが呼ばれたのは、インディアンから教わった「薬草や薬根」についての「専門家としての援助 (professional assistance)」(70)が、「ヘスター自身のためだけでなく、それ以上に子供のためにも必要であった」(70)からである。

彼は、娘の命を奪うのではないかと心配するヘスターに対し、「わたしの子であったとしても、これ以上のことはしてやれない」(72)と言って、パールを腕に抱き、カップの薬を飲ませてやる。パールにとって、彼は命の恩人である。ここでもチリングワースは「苦痛からの解放 (relief of pain)」(72)の役割を果たしている。

彼は、ヘスターにもカップの薬を飲むよう促し、次のように語る。

“ . . . Even if I imagine a scheme of vengeance, what

could I do better for my object than to let thee live,—than to give thee medicines against all harm and peril of life,—so that this burning shame may still blaze upon thy bosom?”—As he spoke, he laid his long forefinger on the scarlet letter, which forthwith seemed to scorch into Hester’s breast, as if it had been red-hot. (73)

ここには、チリングワースが、罪を犯した者の「胸」に触れることによって、「恥辱のしるしがいつまでも胸で燃えているように、生かしておく」役割を果たしていることが示されている。彼は死を与えるのではなく、「Aの文字をつけて生きる」ことを選択させたことによって、Aの文字を「恥辱のしるし」から肯定的な意味を持つものに変容させ、同時に、彼女の精神的な変容を促す働きをしているといえる。

パールの変容は、父親であるディムズデルの「罪の告白」と密接に結びついている。チリングワースは、赤子のパールを抱きさらし台に立つヘスターが、姦通相手を明かそうとしないのを見て、「言え、その子に父親を与えてやれ! (“Speak; and give your child a father!”) (68) と叫んでいるが、彼の復讐行為がディムズデルを告白に導いたのだとすれば、パールに父親を与える手助けをしたことになる。

チリングワースのパールに対する最大の行為は、「結び (Conclusion)」で語られるように、遺言書で莫大な財産を遺したことである。それは彼女に対する世間の見方を、「妖精の子」、「悪魔の落とし子」(261) という否定的なものから、「新世界でいちばん金持ちの女遺産相続人」(261) という極めて肯定的なものへと劇的に変化させた。その後ヨーロッパに渡った彼女の幸福な結婚が暗示されるのは、彼女の変容が、「世間の見方」という外見的なものだけでなく、内面的なものを伴っていることを示している。

このように、チリングワースはディムズデルだけでなくヘスターやパールの内面における「変容」と深く関わり、とりわけ「プラス」の方向への変容に大きな影響を与えているといえるのである。

第4章 チリングワースの変容と作家ホーソン

1. チリングワースの変容について

他の3人の登場人物とは違い、ディムズデルに復讐の炎を燃やし、悪魔のような黒い変容をとげるチリングワースには、同じ変容でも「マイナス」の方向の変容しかありえないように思える。

しかし語り手は、「真実であれ! (Be True!)」(260) と三度繰り返し、「たとえ最悪の資質でないにせよ、最悪の側面を推測しうるような資質を、世間に対して、惜しみなく示せ!」(260) と訴えたあと、次のような意外な見解を提示している。

It is a curious subject of observation and inquiry, whether hatred and love be not the same thing at bottom. Each, in its utmost development, supposes a high degree of intimacy and heart-knowledge; each renders one individual dependent for the food of his affections and spiritual life upon another . . . (260)

また、語り手はこのように述べている。

Philosophically considered, therefore, the two passions seem essentially the same, except that one happens to be seen in a celestial radiance, and the other in a dusky and lurid glow. In the spiritual world, the old physician and the minister mutual victims as they have been may, unawares, have found their earthly stock of hatred and antipathy transmuted into golden love. (260-1)

語り手が、ディムズデルの死後のチリングワースが「根こそぎにされた雑草のように」(260) 消滅し、地獄行きとなったことを暗示する一方で、ディムズデルとの間に「黄金の愛」という究極の愛が芽生えていた可能性を示すのは、ディムズデルだけでなくチリングワースに対しても「プラス」の方向への変容、つまり「救い」の可能性を示唆しているということである。

視点を変えれば、ディムズデルはチリングワースという胸の「恥辱のしるし」を常に胸で燃え立たせる存在があったからこそ、7年間も生き、「偽りの姿」を捨て、「真実の自分」を取り戻すための「告白」

をして、“Be True!”つまり、はじめて「本当の意味で生きる」ことができたのだともいえる。一方で、自分の内面の「暗い必然性 (a dark necessity)」(174)の命じるままにディムズデルに復讐の限りをつくしたチリングワースの行為も、それが「真実に生きる」行為であったならば、たとえ「地獄行き」になったとしても意味のある「生」であったといえるのではなからうか。

しかし、語り手は「救い」の可能性は示すが、実際にそれが存在するのかどうかについては「あいまいさ」を残し、その判断を読者に委ねる。その理由は、「人間は完全にはなりえない」という前提がホーソーンにあるからである。

逆に、人間が真の意味で「人間らしく」あるためには、「完全」ではありえない。ディムズデルが聴衆の心を深く揺さぶる説教をする優れた聖職者であるのは、皮肉にも彼が「罪」を犯した者だからであり、彼が完全無欠な聖人であったなら、人々の心にあれほど強い共感を呼び起こすことはできなかったはずである。ヘスターについても同様のことがいえよう。

また、人間的な暖かい感情に欠けていると非難されるチリングワースについても、妻を寝取られ、嫉妬という人間的な感情から復讐行為に駆り立てられたことによって、ある意味で血の通った「人間性」を取り戻したといえるかもしれない。

前述の「愛と憎しみは根底においては同じ」(260)という主題は、人間の心を「善悪の混合」と考えるホーソーンの根底にある考え方を反映している。別の箇所では、「・・・憎しみは、当初の敵意がたえずあらたにかきたてられて、それ自体の変化をはばむことさえしなければ、緩慢で静かな過程で愛にかわりうる」(160)と表現されている。

そして、「憎しみと反感のたくわえが黄金の愛に変質していく」(261)という文が示すように、ホーソーンは負のイメージを持つ彼自身もプラスの意味に転化しうることを示しているのである。

2. ホーソーンの「錬金術」

ホーソーンはしばしば人間の心を監獄や洞窟に例える。次の引用は『アメリカン・ノートブックス』

の1842年の記述である。

・・・ at the entrance there is sunshine, and flowers growing about it. You step within, but a short distance, and begin to find yourself surrounded with a terrible gloom, and monsters of divers kinds; it seems like Hell itself. You are bewildered, and wander long without hope. At last a light strikes upon you. You press towards it yon, and find yourself in a region that seems, in some sort, to reproduce the flowers and sunny beauty of entrance, but all perfect. These are the depths of the heart, or of human nature, bright and peaceful; the gloom and terror may lie deep; but deeper still is this eternal beauty. (; 237)

この「洞窟の比喻」の構造は、『緋文字』という物語の構造と類似している。「税関」という長大な序文によって物語世界へと誘われた読者は、まず、洞窟の入口を思わせる、第1章の「獄舎の門 (Prison Door)」の門口に、「赤い薔薇」が咲いているのを見つめる。門をくぐり、『緋文字』の世界に足を踏み入れると、そこは、登場人物たちの「地獄のような」苦悩と葛藤の場である。その先に「永遠の美」を見つめられるかどうかは読者次第ともいえるが、ディムズデルが苦悩の果てに「告白」を果たすことや、彼とチリングワースとの間の憎しみが「黄金の愛」に変容したことを暗示されていることなどから、ホーソーンはそこに「永遠の美」を見ているのではないかと思われる。そして、やはりここにも「心の闇」という負の要素が、「心の平和」「永遠の美」というプラスの要素となりうることが示されているのである。

ホーソーンは、この「洞窟」に譬える人間の心の構造を、『緋文字』という物語世界に拡大して描いてみせた、と考えることはできないだろうか。この物語の大半は、登場人物たちの苦悩と葛藤、あるいは心の闇の描写で占められるが、ホーソーンは「心の恐ろしい闇」を描くことに心血を注ぐことが“Be True!”であり、心の「闇」を描きつくすことによつてのみ、その先にある「輝かしくて平和な心」が得られると考えていたのではなからうか。

それを示すように、ホーソーンは「獄舎の門」の最後の部分で、読者に「奇縁によって、歴史の風雪に耐えて生き残ってきた」(48)という一輪の薔薇を差し出し、次のように読者に語りかけている。

Finding it so directly on the threshold of our narrative, which is now about to issue from that inauspicious portal, we could hardly do otherwise than pluck one of its flowers and present it to the reader. It may serve, let us hope, to symbolize some sweet moral blossom, that may be found along the track, or relieve the darkening close of a tale of human frailty and sorrow. (48)

ここには、登場人物たちの「弱さと悲しみの物語」が「甘美な精神の花」へと変容することを願うホーソーンのまなざしと、この暗い物語のなかの「救い」の可能性が示されている。

このように、『緋文字』という物語は、「マイナス」から「プラス」への方向性を持った、様々な「変容」が描かれた世界であるということが出来る。

「結び」に置かれた、「地上における憎しみと反感のたくわえが黄金の愛に変質していく (their earthly stock of hatred and antipathy transmuted into golden love)」(261) という一文は、物語に描かれる「憎しみ」や「反感」といったすべての負の感情を「黄金の愛」という至上の愛に昇華し、浄化するイメージを喚起する。これこそ作家ホーソーンによる「錬金術」であろう。

人間の心は、「悲しみ」を癒し、「憎しみ」を「愛」に、「苦しみ」を「喜び」へと変容させる、不思議な力を持っている。その一方で、チリングワースやディムズデルの「黒い変容」が示すような、悪魔的ともいえるダークな側面も併せ持っている。これをホーソーンは、物語の冒頭で既に提示している。

第一章「獄舎の門」において、ホーソーンは罪びとの心を象徴した「監獄」の前の草地の一方の側に、「監獄という文明社会の悪の華とうまが合う」(48) という「見苦しい雑草 (unsightly vegetation)」(48) を生い茂らせ、もう一方の側に、「大自然の奥深い心が、囚人をあわれみ、なぐさめたいと願っていたことの証拠」であるという、「一株の野性のバラ (a wild

rose-bush)」(48)の花を咲かせている。この印象的な「赤と黒のコントラスト」は人間の心の二面性を示しているが、同じものを、ホーソーンは「結び」の最後の部分にも配置している。次の引用は、ヘスターの眠る墓石に彫られた紋章についての描写である。

It bore a device, a herald's wording of which might serve for a motto and brief description of our now concluded legend; so sombre is it, and relieved only by one ever-glowing point of light gloomier than the shadow:

“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”
(264)

物語は冒頭と結末の「赤と黒のコントラスト」によって円環をなしている。これは入り口と内奥で円をなす、人の心の象徴である例の「洞窟の比喻」と同じで構造である。このことは、ホーソーンが『緋文字』の世界を描くことを通して、普遍的な人間の心のありようを描こうとしていたことを示している。

最後に記された、意味深長な題辞における、「赤キ A ノ文字 (THE LETTER A, GULES)」とは、人間の生の根源を示したものである。それは、ヘスターが体現する「情念 (passion)」(84) であり、ディムズデルの罪の原因である「強烈な動物性 (a strong animal nature)」(130) であり、またこの二人の性質を受け継ぐパール「野生の血 (wild blood)」(261) を示したものである。また、チリングワースを激しい復讐に駆り立てたものの根源もここに見ることが出来るかもしれない。

「結び」における「A の文字」の赤は、人間の情念が「罪」と密接に結びついたものであることを示すが、これと対応する冒頭の「バラ」の赤は、「甘美な精神の花」とホーソーンが表現する、人間の内面の究極の美しさを示したものである。この「赤いバラ」は、錬金術においては「金」と同様に「完全な人間性」の象徴である。¹¹ホーソーンは、この二つの「赤」のイメージによっても、「人間の生の根源」の両義性を表現しているのである。

チリングワースの存在意義は、「暗いけれども、たえず燃えさかる、影よりもなお暗い一点の光」とし

て示される、人間の生の根源である「赤キ A ノ文字」を、「黒地(ON A FIELD, SABLE)」として際立たせ、かつ「救う」ことにあったといえる。そして、この錬金術師チリングワースの姿は、いつしか作家ホーソーンの姿へと変容を遂げている。

このように物語は自らの尾を噛む蛇ウロボロスのような円環をなしている。ウロボロスは「宇宙の統一を標榜する中世の錬金術師たちのエンブレム」¹²であり、チリングワースゆかりの象徴でもある。そして『緋文字』という錬金術的世界において、「人間の生の精髓」である“Elixir of Life”を探し求める真の錬金術師は、作家ホーソンであるといえるのである。

結論

このように、「錬金術(alchemy)」というものを手掛かりとして、『緋文字』という物語におけるチリングワースの存在について考察してきたが、人の心のなかに「金」を求める錬金術師チリングワースを通してホーソンは何を描こうとしていたのであろうか。

強烈な悪魔的イメージを持ち、罪びとの心に寄生する「醜い草」であり「蛭」であるチリングワースは、本来、人間の内面の完成を志向する錬金術師であった。「醜く黒い草」を「効能のある薬」に変える“black art”という錬金術が「奇跡的ともみえる癒し」をもたらすように、チリングワースは「醜い草」として罪をあばき、心の醜さや、直視したくない現実というものをまざまざと思い起こさせる役割を果たすことで、敵であるディムズデルの心を破滅させるのではなく、結果的に「救い」へ導く役割を果たしているのである。この意味で、彼はマイナスの要素をプラスの要素に変容させる錬金術師であるといえる。

このチリングワースの存在は、人間の心の不思議なありようを示しているともいえる。「悲しみ」を癒し、「憎しみ」を「愛」に変え、「苦しみ」さえ「喜び」に変容させる不思議な力を持つ人間の「心」は、同時にチリングワースが体現する悪魔的ともいえるダークな側面を併せ持ち、相反する性質が混合した存在でもあることを示している。ホーソンは人間

を「善悪の混合」した存在であると考えているからである。

ホーソンは、罪を責め、「苦しみ」を与え続けるチリングワースが、実はディムズデルの「救い」をもたらす存在であったように、「生きる」ということの真の意味は、「暗い闇」の中での「苦しみ」によってこそ明らかになるのだと考えていた。また、「罪」や「憎しみ」という人間の最も醜い部分にこそ、人間の真の姿、人間の「本質」が隠されているとも考えていたのである。そのような人間の内実を明らかにする者は、悪魔的なイメージを持つ錬金術師しかありえなかったともいえる。悪魔的人物が「救い」をもたらすというアイロニーは、人間の「生」というものの不思議なありようを見事に示している。

ホーソンは、錬金術というものが象徴する「完全性」や「永遠性」というものに強く魅せられていたが、彼の最大の関心は、極めて地上的なところ、「人間がいかにか真に生きるか」ということにあった。それが、語り手のいう、「たとえ最悪の資質でないにせよ、最悪の側面を推測しうるような資質を、世間に対して、惜しみなく示せ！」(260)ということであり、“Be True! Be True! Be True!”(260)の意味なのである。チリングワースが「暗い必然性」に身をまかせて復讐の鬼と化すことも、ある意味でホーソンが繰り返す“Be True!”を全うすることであり、真に「生きる」という姿であったにちがいない。その証拠としてホーソンは、「憎しみと反感のたくわえが黄金の愛に変質していく」という文によって、チリングワースという錬金術師が負の感情をプラスに転化する役割を果たしているだけでなく、負のイメージを持つ彼自身もプラスの意味に転化することを示している。

錬金術師が「金」や「真実」を追い求めるように、「生きる」ということの根源が何であるかを追及することを、作家であるホーソンは自分の使命であると考えていたはずである。この意味において、あの哀れな錬金術師チリングワースが「不老不死の妙薬」を求めたように、作家ホーソンは、ウロボロスの蛇のような円環をなすこの『緋文字』という物語世界において、「人間の生の精髓」である“Elixir of Life”を探し求める錬金術師といえるのである。

注

- ¹ テキストとしては、Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. vol.1 (Columbus: Ohio State University Press, 1962) を使用。ホーソンの作品からの引用はすべてこの版による。以下、引用末尾の括弧内に巻数：ページ数の順に示す。ただし、*The Scarlet Letter* からの引用は、ページ数のみを括弧内に記す。和訳については、八木敏雄訳『完訳緋文字』（岩波書店、1992年）と鈴木重吉訳『緋文字』（新潮社、1957年）を参考にした。
- ² *The American Notebooks* (1832-53) の1844年の記述、‘Ethan Brand’(1850) にホーソン自身の定義がある。
- ³ 丹羽隆昭、『恐怖の自画像 ホーソンと「許されざる罪」』（英宝社、2000年） p.18
- ⁴ 同上、pp.18-9、45-6 参照。
- ⁵ 八木敏雄、p.396 参照。
- ⁶ 吉村正和、『フリーメーソンと錬金術』（人文書院、1998年） p.117-8 参照。
- ⁷ 小山敏三郎、『詳注緋文字』（南雲堂、1967年） p.345、ミルチャ・エリアーデ（大室幹雄訳）『鍛冶師と錬金術師』（せりか書房、1993年） p.203-4 参照。
- ⁸ F. O. Matthiessen, *American Renaissance, Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York: Oxford University Press, 1941), p.349
- ⁹ 西前孝、『記号の氾濫 『緋文字』を読む』（旺史社、1996年） p.81 参照。「英語の“leech”には、本来語源を異にしながらも、『血』のイメージを介して結びついている少なくとも二つの意味がある。一つは『医師』、もう一つは『蛭』である。かつて蛭は血を吸う性質を利用して医療に用いられたことが知られている。ホーソンはチリングワースの性格づくりにこの連想を利用したはずである」との指摘がある。
- ¹⁰ 下中邦彦編、『世界大百科事典 23』（平凡社、1967年） pp.393-4 参照。
- ¹¹ 若桑みどり、『薔薇のイコノロジー』（青土社、1984年） p.17 参照。
- ¹² 丹羽隆昭、p.45

使用テキスト

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter, The*

Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, ed. William Charvat et al. vol.1 Columbus: Ohio State UP, 1962.

参考文献

- Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. vol.8 Columbus: Ohio State UP, 1972.
- . *Twice-Told Tales, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. vol.4 Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance, Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*, New York: Oxford UP, 1941.
- 国重純二訳 『ナサニエル・ホーソン短編全集』南雲堂、1994年
- . 『ナサニエル・ホーソン短編全集』南雲堂、1999年
- 小山敏三郎編注 『詳注緋文字』南雲堂、1967年
- 下中邦彦編 『世界大百科事典 23』平凡社、1967年
- 鈴木重吉訳 『緋文字』新潮文庫、1957年
- 西前孝 『記号の氾濫 『緋文字』を読む』旺史社、1996年
- 丹羽隆昭 『恐怖の自画像 ホーソンと「許されざる罪」』英宝社、2000年
- ミルチャ・エリアーデ（大室幹雄訳）『鍛冶師と錬金術師』せりか書房、1993年
- 八木敏雄訳 『完訳緋文字』岩波文庫、1992年
- 吉村正和 『フリーメーソンと錬金術』人文書院、1998年
- 若桑みどり 『薔薇のイコノロジー』青土社、1984年

(Received: September 31, 2007)

(Issued in internet Edition: October 31, 2007)